

彦根景観シンポジウム 2014

「文化遺産を活かして住み続けられるまちへ」

— 京都・修徳学区のまちづくりに学ぶ —

彦根景観フォーラムは彦根辻番所の会などと共催して、平成26年10月26日（日）、彦根市の四番町スクエア・四番町ダイニングで、彦根景観シンポジウム 2014 を開催、約70名が参加しました。



第1部では、京都市の修徳学区で歴史的なまちなみを大切にしまちづくりに関わってきた西田教子さんが、「修徳景観づくり協議会」や「まちなみ文化財」の取り組みを、まちづくりの

経過とともに紹介されました。

つづいて、京都市でまちづくりのコーディネート



をされているNPO法人京都景観フォーラムの森川宏剛さんが、修徳学区をモデルとした先斗町まちづくり協議会や桂坂景観まちづくり協議会などの事例を紹介され、行政と連携した

地域主体のまちづくりの現場の様子を報告されました。

第2部では、彦根市芹橋二丁目のまちづくりの経過を彦根辻番所の会の渡邊弘俊さんが報告され、パネルディスカッションでは、コーディネータに彦根景観フォーラム理事の笠原啓史さん、パネリストに、二人の講師の他に、彦根辻番所の会の菅勝造さん、林治さん、コメンテーターに山崎一眞滋賀大学客員教授が登壇し、京都と彦根の経験を比較しながら、共通点と違いについて意見を交換しました。

このシンポジウムの目的は、大きく2つあります。一つ目は、住民が主体で進めるまちなみづくりの具体的な仕組みである「修徳景観づくり協議会」と「まちなみ文化財」を学ぶこと。二つ目は、修徳と芹橋の経験を比較し、まちづくりの手法や今後の進め方を学ぶことです。

修徳景観づくり協議会

修徳学区は、JR京都駅から北へ徒歩で20分の五条通と烏丸通の交差する北側の地域で、伝統的な京町家とマンションや現代住宅が混在し、まちなみが乱れているという課題がありました。



そこで、建て替えや新築を行うすべての建物について、施主が国や市で定められた建築確認などの法的手続きを行う前に、自治連合会の「まちづくり委員会」に申し出ただき、まちづくり委員会・建築分科会を通じて、町内会と施主が話し合いの場を持ち、京都府建築士会や京都大学、市などの専門家がサポートして景観シミュレーションを行いながら、よりよいまちなみづくりができるように調整する「修徳景観づくり協議会」を開催しています。

西田さんは、修徳学区の住民で自治連合会のまちづくり委員会常任委員、修徳景観づくり協議会専任委員でもあります。

この取り組みは、修徳学区に住む新住民を町内会が歓迎し、地域の一員として一緒によりよい暮らし方や景観づくりを話し合おうと地域で合意し、自発的にスタートしたものでした。



京都市の景観政策の進化

これに注目した京都市は、地域主体のまちづくりを応援する施策として「地域景観づくり協議会」制度を平成23年4月に創設しました。

これは、自治会などで組織された「地域景観づくり協議会」と景観づくり計画を市長が認定し、その地域で建築等を行う者に「地域景観づくり協議会」で意見交換をするよう条例で義務付けるもので、話し合いによってまちづくりの経験を積み、地区計画や景観協定などの地域独自ルールを見出そうというものです。

現在、修徳、先斗町、西之町、一念坂・二寧坂、桂坂、姉小路界隈、明倫の市内7地域で、自治連合会などがこの制度を活用して地域主体の話し合いによるまちづくりに取り組んでいます。

修徳まちなみ文化財

まちなみに貢献している建物を新旧問わず探し出して「まちなみ文化財」として表示しています。古くても素敵な建物を2年にわたり調査し、ワークショップで選定されました。



①町家、②町家風のビルや近代建築・平成の町家、③神社、お寺、④まちなみの4分類で、今後守るべき、まちなみづくりの模範例を示して、まちづくりへの機運を高めようとしています。選ばれた建物の所有者の多くは、古い家を恥じていて、その価値を認識していなかったのですが、選定をとおして大切さに気づくことになりました。



まちづくりのきっかけ

今回のシンポジウムでは、修徳学区のまちづくりと芹橋二丁目のまちづくりの経過の共通点と違いが浮き彫りになりました。

修徳学区のまちづくりのきっかけは、日本初の小学校で、人々の心の拠りどころであった修徳小学校が昭和63年に統合・廃止されたことでした。拠点を失った中で、平成4年、跡地利用をめぐって連合自治会に「まちづくり委員会」が発足します。そし

て、自治会館、特別養護老人ホーム、児童館などからなる「修徳ふれあい福祉会館」が整備されました。



ついで、校庭部分の整備を巡って平成11年に2回の住民アンケートを実施、ワークショップを何回も繰り返し、手作りの公園計画を完成させます。この公園は大成功で、多くの子どもや大人、高齢者が利用しています。この経験は、自治会の力が弱まる中で、新たな住民意思の集約手法として大きな自信につながりました。

芹橋二丁目のまちづくりのきっかけは、辻番所をもつ足軽屋敷の売却でした。多くの足軽屋敷で、老朽化に伴い、除却や建て替えが進んでいました。また、路地が狭く自動車が入りにくいため、古い屋敷群を除去して道路を広げる要望もありました。

しかし、辻番所という芹橋ならではの遺産を失ってはならないという住民や市民の危機感が、平成19年の「彦根古民家再生トラスト」の設立につながり、700万円近い募金が集まりました。

トラストは、これを彦根市に寄付し、市が建物を買収、市文化財にして保存・改修に入りました。



このように、普段は意識されていない建物や空間の危機に直面して、失うものの地域や自分にとっての意味が問い直され、新しい意味づけがされて「自分事として取り組もう」という活動が共通して誕生しています。その結果、修徳では地域の人々が再び集う新たな拠点の整備に、芹橋では歴史的な建物の保存・再生につながったのでした。

まちづくりの展開



拠点整備の後、修徳学区では、今後のまちのあり方に関心が高まり、(ノ)